

第4章 避難所生活から新たな生活へ

～ 避難者の方の手記 ～

「今 想 う あ の 日 」

南相馬市小高区 杉 義行

3月11日自宅でテレビを見ていました。2時46分緊急地震警報が発令され、ゴウーと云う音と共に大きな揺れが長く続き、危険を感じ外に飛び出しました。揺れが納まり周囲を見ると屋根の棟瓦が落下していましたが、その他はあまり壊れていない様なのでほっとし、家に入りテレビを見ると津波警報が出されていましたが、私の家は海岸より2km離れて高台ですので津波の心配はしませんでした。親戚の家が心配になり車で行って見ますと大きな波が防波堤を越えて家屋を一瞬にして押し流すのが遠くより見えました。自然の猛威にただただ驚き唖然と眺めていました。

みんな避難して犠牲者が一人もいなければと思いながら家に戻り、その夜は近所の家から自家水をもらい家族四人で一夜を過ごしました。

12日早朝、近所の友人宅に行った所、息子さんが「福島第一原発が爆発するかもしれない。危ないからと子供も小さいしこれからすぐに遠くに避難する」と布団・毛布等車に積み込んでいました。

この時まだ原発の危険な状態は私には解りませんでした。息子さん家族と別れ、家に戻り親戚の2人、妻と息子ら6人で朝食をパン・おにぎりで済ませテレビを見ていました。

午後3時36分福島第一原発1号機の水素爆発が画面に放映されました。自宅は原発より13km離れていますが、大きなドカーンと云う音が私達にも聞こえました。

半径10キロ圏には避難指示が出たようですが、私はまだ避難する考えは持っていませんでした。食事はおにぎり・パン・ペットボトルで済ませていました。夜8時30分頃に小高区消防団員の方が来宅し「ここも危険だから今すぐに避難しなさい」と云われ9時頃原町区石神中学校体育館に向かいました。普段は25分位で着くんですが避難する車で渋滞し1時間近くかかりました。避難所の体育館に着いてみると、もう避難者でいっぱいので私達の居場所はありません。そこで私達は二階の教室に案内されましたが、ゴザ・毛布等一枚も無く横になる事も出来ず、寒さで一睡も出来ず朝を迎えました。もちろん水・パン・おにぎり等、口にする物は何一つ有りません。朝6時ここにいても何一つ無し、食事も出来ないで自宅に戻る事にしました。幸いにしてこの地区は電気が来ていたので助かりました。

早速ペットボトルの水でご飯を炊き食事を取り皆でテレビを見ていたら、11時1分第一原発3号機の水素爆発が放映されドカーンと云う音が又聞こえました。これから先どうなる事かと心配でしたが、遠くに避難するにはガソリンも無くどうする事も出来ず私は自宅に居ることにしました。その後近所の方が来て「避難するから一緒に行こう」と言われ、妻と息子は11時40分に原町区の文化会館ゆめはっとうに行くと家を出ました。自分と親

戚の杉本さんは家に残って居たんですが、消防団員の方が来て「ここは危険だから早く避難しなさい」と云われ、私達も4時30分にゆめはつとに向かいました。着いてみるとここも避難者の方で一階も二階もいっぱいでした。妻、息子、近所の5家族の皆さんと再会できほっとしました。

雑談しながら過ごし夜を迎えたが、慣れないせいか眠れず、毛布一枚持って車で一夜を過ごしました。残っているガソリンも少なくヒーターもかけられず寒さで震えながら朝を迎えました。

3月15日、今日は朝から雨でみんな避難所でテレビを見て居ました。午前6時15分第一原発2号機爆発。続いて同時刻頃4号機も爆発したとの報道がありました。

今まで国も東京電力も私達国民に対して原発は絶対に事故は起きない。絶対安全だと耳に胝が出来る位言われ聞かされてきました。この事故を私は驚きませんでした。この世に絶対安全と云う事は無いと思っています。あるとすれば数学の絶対数です。だから絶対に安全と云う言葉は信用していませんでした。

近所の方々と雑談しながら1日を終え、タマゴ大のおむすびで夜食を取り毛布一枚敷いて眠りにつきました。この時は皆さんも近日中に自宅に戻れるものと信じていました。明日、別れ別れに成るとは想像もしていなかった様です。

3月16日朝、避難所内で知り合いの橋本尉記君に偶然に逢いました。今度の大津波で家屋も何もかも流され、着の身着のままで避難所に来たとの事でした。「私の古着で良かったら自宅に有る」と話したら「良い」と言う事で家に戻り持って来る事にしました。しかし車のガソリンが余り残って無かったので往復する事が出来るか心配でしたが、なんとか持ってくる事ができました。近所の皆さんと雑談しながら居ると午後3時頃だと思いますが、消防団員の方が廻ってきて、「これから皆さん方にガソリン10ℓの券をあげるから、どこの場所でも避難できる人は自主的に避難しなさい」と言われ、「ただし、行く所がない人はここに残っても良い」と云う事でした。何人かは券をもらって出て行きましたが、私はガソリン10ℓでは遠くに避難する事は不可能だと思い近所の皆さんと相談した結果、全員ここに残ることにしました。ところが30分もたたない内又、消防団員の方が来て「全員この場所に居られない。今、大型バス6台を手配したから早くみんなバスに乗れ」と云われ私、妻、息子、杉本さん、橋本さん夫婦、敏幸君の7人でバスに乗りました。

この時、近所の皆さんとは別れ別れになり、どこに避難したかも分かりませんでした。その後の消息も3ヶ月程分かりませんでした。

バスの中で運転手さんが「これから新潟県の三条市に向かう」と出発したのは4時30分でした。まもなく周囲が暗くなり外も見えなく、故郷もだんだん遠くなりいつになったら戻ることが出来るのか。その事ばかり考えバスに身を委ねていました。まだ道路の脇には残雪が有り寒い寒い夜でした。2回程ドライブインで小休止をとり、三条市総合福祉センターに着いたのは深夜12時。ここがこれから私達がお世話になる建物なんだと、ふと外を見ると寒風の中玄関で出迎えてくれる方がいました。すぐに多目的ホールに案内され

市長さんの挨拶が有り「南相馬市の皆さん大変でしたね。三条市は皆さんを出来る限り最後まで応援します。」と心強く話され、寒風の中出迎えていた國定市長さんの姿に心に熱いものを感じました。この後、大浴場で六日ぶりに風呂に入り、床暖房のあるホールで明日からの生活を考えながら久しぶりにぐっすり眠りにつきました。

三条市に来て初めての朝を迎え6時に起床し、センターの外に出て見ると大きな福祉センターの建物に驚きました。福祉関係が充実している三条市だから私達を温かく受け入れてくれたんだと思いながら、ふと南相馬市の現状を思い出しせつない気持ちになりました。朝食を取りホールで新聞を読んでいたら、昨日私達より早く二階和室に避難されている南相馬市の方達が居ると聞き部屋を尋ねてみますと、原町区、浪江町、双葉町の人達が何人か居ましたが、大多数は小高区の顔見知りの人達でした。これから先皆さんと協力して仲良く生活していけると心強く思い安心しました。私の年齢になりますと働く事も出来ませんので、明日からの一日一日を何をして過ごすか悩んでいました。毎日朝から晩まで同じ新聞を読み返して過ごしていました。一ヶ月が過ぎ日夜一日も早く故郷に帰りたい想いで頭の中はいっぱいでした。このままではお盆に帰れずお墓参りも出来なくなるのでは、と思い一時家に戻って父母と娘の位牌、車を取りに4月16日一ヶ月ぶりに家に帰り19日三条市に戻りました。

4月中旬ボランティアリーダー岸本靖司さんが、釣クラブを作ってくれて釣り道具一式を避難所に持って来てくれました。私も喜んで入会し、釣りに行く日を楽しみに準備していました。4月26日に管野さん、清信さん三人で始めて近くの小川に行きました。魚は一匹も釣れませんでした。何もかも忘れ半日楽しく遊んで来ました。その後、岸本さんには新潟東港、寺泊港、下条ダム、五十嵐川、中之口川等々何回も自家用車で連れて行ってもらい、キス・ヘラブナなど釣って楽しい日を過ごさせてもらい有難うございました。

私はゲートボールもやりたくて三条市の職員さんに聞いてみたら、翌日西大崎の公民館を教えてくださいました。公民館に行くと三条市ゲートボール協会事務局長の佐々木昭雄さんが来てくれ、「毎日午前中練習しているから明日から来なさい」と云われ練習に行く事にしました。

西大崎の諸橋忠夫さんはじめ皆さん心よく迎えてくれました。何日か練習に通い6月7日の大崎公民館長杯ゲートボール大会に大崎チームの選手として、小畑利子さん共々参加させていただき良い思い出が出来ました。大崎ゲートボール協会の皆さん本当に有難うございました。

一時、福祉センターに二百数十名の避難者が世話になっていましたが、南相馬市鹿島区に仮設住宅も完成し、5月28日第一陣で親しい橋本尉記さんが帰郷する事に成り寂しくて見送りの時は涙が出ました。仮設住宅には私も申し込んでおりましたが家族構成又、年齢の関係もあり優先順位は下の方だと思っていました。予想通り2回目も当たりませんでした。

7月に入り近所に住んで居る上杉悦子さんから電話が有り、原町区に知り合いのアパートがあるので今すぐ申し込みすれば入居出来ると連絡が有り申し込み、7月29日退所する事になりました。本来なら福祉センターにはまだ多くの方々が残っていました。その方達の退所を見送ってから最後に退所すべきだと思っていました。それもままならず心苦しい限りです。

四ヵ月半の長期にわたり三条市職員の方々、ボランティアの多くの皆さんには多大な支援をいただきまして心より感謝申し上げます。数々のイベント、温泉一泊旅行等々。又避難者の為に乗用車、自転車を配置され利用させて頂いて何の不自由も無く生活することが出来ました。本当に有難く思っております。

退所の日朝から三条市は大雨でした。センター玄関前で皆さんに見送られて9時30分福祉センターに別れを告げ、南相馬市に向かって車を走らせました。途中前方が見えなくなる程の豪雨にノロノロ運転でどうにか南相馬市のアパートに着き、一ヶ月アパート生活し、9月1日仮設住宅に転居しました。

南相馬市に帰って来て皆さんの様な心を持つ事が出来るかいつも自問自答しています。

最後になりましたが、三条市の益々のご発展と市民の皆様方のご健勝を相馬の地から祈っております。本当に長い間お世話になりました。有難うございました。

4月5日に三条市内の県営住宅へ移ることが決まってからは、総合福祉センター近くの「コメリ」、「ダイソー」、「しまむら」などへ日用品、調理道具、食器、風呂用品、洗濯用品、枕などを揃えるために通いました。

テレビと炊飯器は家に一時立ち入りして持ち出しましたが、テーブルも食材も調味料も無い中で新生活が始まりました。

親子5人は揃いましたが、全く知らない地域での生活は『孤独感』を感じていました。地元新聞の取材も受けましたが、そっとして欲しい気持ちもありました。

移ってすぐに三男の学校が始まり生活のリズムも少しずつできましたが、他の家族は仕事も無くゴロゴロとするしかありませんでした。

4月中旬に長男、下旬には次男、5月に入って夫が仕事の準備で南相馬市原町区内の親類宅へ戻って行き、一緒に避難していた義父母は避難所に残るということで、家族はバラバラの生活になりました。

自宅は20キロ圏内の警戒区域にあるため先に戻った家族が長期に亘り親類宅での生活で迷惑を掛け申し訳なく思い、借上住宅が決まったときはホッとしました。8月には避難所にいた両親も借上住宅へと戻りました。

新生活では、まず食材仕入れのためにスーパーの位置を確認しながら行動範囲を広げていきました。毎日「地図」を眺めては自転車で片道30分ほど走りカゴいっぱいにして買い物をしてました。すっかり日焼けをしまい久しぶりにあった友人がびっくりしてました。

車の登録ナンバーが「福島」のため多少ためらいがあったが、市内をあちこちへと行きました。南相馬の借上住宅へは高速道路を利用して往復しました。震災前には全く縁の無い生活でしたが、片道4時間（距離にして250キロくらい）を何度も往復しました。加茂市、五泉市を抜けて安田インターチェンジから東北自動車道の二本松インターチェンジ間を利用し更に1時間以上かけて借上住宅へと向いました。冬の期間は三条燕インターチェンジを利用します。それでも4時間かかります。

三男は三条市内の高校に転入学しました。本来なら正式な手続きをしなくてはいいのに簡略化していただき、学校側も大変だったと思います。新しい学校で高校2年生をスタートしましたが、複雑な気持ちで通っていたと思いますが、同じ高校出身の同級生がいたので心強かったと思います。今ではすっかり地元高校になじんでいるみたいです。卒業までこちらで過ごす予定です。

新潟県での生活で一番の心配は冬の雪です。3月16日深夜にこちらに入ったときに交差点の信号機が縦型で、しかも消雪の水がでていたので「雪が多い所なんだ」と実感したことを覚えています。自宅のある福島県の浜通りでは雪が降ることはほとんど無く、冬も

太陽が出ることが多く「乾燥注意報」がよく出ます。それが毎日がスキー場で見える雪の量の中で生活していることが夢であってほしいと思いました。毎日、見よう見まねで雪かきと雪運びをしています。雪が心配で朝は食欲も無く、ひたすら駐車場から無事脱出できますようにと祈っています。駐車場には消雪の水が出ないので人の力だけで除雪するしかない現実が毎日あり、圧雪で盛り上がり駐車場と道路に段差があります。今一番の願いは。福島からもってきた車が壊れないことです。

三条市の皆さんの中には私達「避難者」をこころよく思っていない方もいると思うのですが、いろいろと面倒を見ていただきました。まだまだこれから多大なご迷惑をお掛けすることがあると思います。日本全国に散らばっている福島県人の中には、警戒区域に自宅がある人、計画的避難区域に自宅がある人、子供の身体が心配で自主避難した人、それぞれがいろんな事情で今の生活を送っています。もちろん福島県内に残るという選択しかなかった人も居ます。同じ福島の人が状況の違いで対立してしまわないか心配です。中には避難することで何らかの補償が出るから戻らないという人も居ると聞きます。とても複雑な思いです。

最後に、私が生活している県営住宅は1号棟の4階なので台所の窓から「弥彦山」や「国上山」がきれいに見えます。7月末の豪雨の時は「五十嵐川」が茶色の水でいっぱいになりどうなるのか心配になりました。初めて断水も経験しました。またご近所が近いので生活感のある日常が聞こえてくるのが安心します。普通の生活を送ることが出来ています。何年かけてお返しできるか分かりませんが本当に感謝しています。ありがとうございます。

東日本大震災広域避難者受入れの記録

平成25年3月29日 発行

発行者 新潟県三条市

編集 三条市総務部行政課防災対策室
〒955-8686
新潟県三条市旭町二丁目3番1号
TEL 0256-34-5511
FAX 0256-34-5691

印刷 三条印刷株式会社



三条市はみなさん一人ひとりを
全力で応援します!!